モラルサイエンス研究会（令和元年 11 月 6 日）発表要旨

自然的存在から道徳的存在へと進化したヒト／人間
―大きな脳がもたらした変化―

生命環境研究室
客員教授　立木教夫

廣池千九郎博士の道徳思想には、自然界の生物進化のプロセスにおいて道徳が出現したとするボトムアップのアプローチと、聖人が捉えた神の慈悲心を前提とする最高道徳からのトップダウンのアプローチが存在する。この二つのアプローチをどのように接続するのかということは大きな問題であり、今日でもまだ、うまく接合されたとはいえない。今回は、この問題を人類進化の中に置き、進化過程で脳容量が増大し、それに伴って新たな能力が獲得されたことを手がかりにして、考察した。大きな脳の獲得は、ヒトに重いコストを突きつけ、そのコスト解消に努力する中でヒトは新たな能力、とりわけ、メンタライジング能力と言語能力を獲得し、道徳的世界を切り拓いたことを、進化人類学、進化心理学の成果を踏まえて、解明した。その結果、普通道徳の誕生は、40 万年前に起源した「二人称的道徳」と 10 万年前に起源した「客観的道徳」にあり、最高道徳の誕生は、伊東俊太郎先生が示された「精神革命」の時期にあることが明らかになった。このような道徳の進化的枠組みが示されたことで、最初の接合問題は徐々に解消されることになるのではないだろうか。